

素人小説

第3回「某社長の読書」



株式会社 BSO

1 第3回「某社長の読書」

- ・ 読書とはほかの人の財産をもらうこと
- ・ まず手間暇がかけられた書物に感心する
- ・ わくわく短文探し
- ・ 朝の床入り

読書とはほかの人の財産をもらうこと

彼は、社会が構造的に変わっているなかで、これからの時代がどのようなになり自分の会社の事業や経営をどのように変えていったら良いかを考えるため、経済関係の書籍を多方面にわたって、ここ2年程貪欲なまでに読み続けて来た。しかし、これといった答えをまだつかむことが出来ず、ストレスというよりはもやもやした気分がますます強くなる日々を過していた。

彼はいつ頃からか「本を書ける程の人の話しを聞ける機会はそんなに沢山持てる訳ではない。本というものがあることに感謝するとともに最大限活かさなくては」という考え方を持つようになっていた。また、「読書は、ほかの人の経験や創造したものなど、いわゆる人類の知的財産を自分のものにするのが出来、自分の人生を広げてくれたり楽しみを増やしてくれたりする」という読書観を持ち、比較的読書を良くする部類の人間である。

その彼が、最近の読書に疲れを感じ出していた。結果的にはビジネスのハウツー的なものばかりを読んでいたなあど苦笑しながら、大分以前に「面白いよ」と知人がわざわざ持って来てくれ机の右端に置いていた6冊の「ローマの人の物語」を気分転換も含みながら読み出した。

まず手間暇がかけられた書物に感心する

この本は歴史書である。まあ、時々行くところでもあることだし、ローマの歴史を知っておくのも訪問したときの楽しみが増えて良いといっ程度の気持ちで読み始めた彼であったが、すぐにのめり込む読み方に変ってしまった。とにかく、膨大な資料を調べ色々な角度から徹底的に分析したり考えたりして書かれていることにも感心させられた。それ以上に驚いたのは、史実をくどくど書いているにもかかわらず論理的で、「なるほど、なるほど」と納得しながら読めることに感心させられた。さらにのめり込むことになったのは、史実の説明の中で、時々自分の受止め方や考えを短文できらっと書いていく。ほかの人には大したことではないかも知れない。しかし、彼にはこの短文が気になって、また次はどこでどのような短文が出て来るのか、わくわくしながら読むようになってしまったようである。

わくわく短文探し

彼は、「わくわく短文」に遭遇して、自分なりの解釈をし、領いたり色々なことを思い出したり連想発想しては楽しんだ。

『人は他に心を傾けるものがないと、それまでのものにより強くすがりつくのが

常である。』

「そうだよ。自分にしても社員にしても、なにか挑戦していないと、どうしても過去のことを思い出し、それが良かったとか拙かったかを頻りに話題にして、前向きな話にならないことが多いなあ」と苦笑してしまった。

『無理強い、永続にとっては最大の敵なのである。』

製造設備が高額化し、24時間フル稼働させないと償却できないと考え、二交代制に移行することを心に決めた時のことを思い出した。あのときは、新鋭設備が入ると同時に「二交代勤務制を来月から行う。」と発表した。その途端に反対者が続出し、大量の退職者を出て、社内が混乱し収拾がつかなくなった。二交代制の導入は撤回せざるを得なくなってしまった。撤回した後でも混乱は結構長引き、二交代制導入の機会が持たずに数年が経過している事を思いだし、そうだったなあと思った。

『妥協とは、折り合いをつけることであり、参加者全員が歩み寄って（一致点（平たく言えば落としどころ）を見つけ、それをその事業の目標と定めることである。そうした場合は、参加者はいずれも、何らかの不満をいなく結果に終わるやすい。）

彼は皆の意見を取り纏めることができないう「妥協」はしないよう心がけてきた

ことは良かったと再確認した。そして、時間がかかっても「納得」、できれば「想い」や「理念」を共有した取り組みを今後も大切にしていけることを心に決めた。

『知性とは、知識や教養だけではない。「多くの人が見たいと欲する現実しかない」という現実を見据える才能であると思うが、見据えるだけでは充分ではない。見据えた後で、それがどの方向に向かうのが最善の道と理解してこそ、真の知性と言えるのだと思う。言い換えれば、創造性を欠く現実認識力は、百点満点の知性ではない。』

彼はこの短文で、「知性」の定義に興味を持ったわけではなかった。「多くの人が見たいと欲する現実しかみない」という現実を見据える」という箇所と、「創造性を欠く現実認識力」という箇所に気を引かれた。自分もまた「見たくないことを見ない」ことが多く、それが問題を起こしている。また「どの方向に向かう」か予測することはあっても「最善の道」かどうかを考えるような「現実認識」をしていかなかった事に気づかされた。確かに、経営者たるべき者は、予測するだけでなく、人間社会にとって最善かを考えた経営を行うことが大切であることを改めて自覚した。また、「現実認識はたしかに「未来」のために行うことであり、本来「創造性」がないと意味がないと真面目に思った。

『人間とは責任感と自負心を持ったときに最もよく働く。使う側から言えば

駆使できる。』

彼はいつも気楽に使っているこれらの言葉について、何か無性に辞書で確認したくなった。彼は、身近にあった辞書でこの二つの言葉を調べた。

「責任感」とは「しなければならぬ努力、負わなければならない貴めを重んじる気持ち」、「自負心」とは「自分で自分の才能・学問仕事などに自信を持ち、誇る心」とあった。

彼は社員に「責任感を持って」と良く言っている自分について考えると、自分が滑稽に見えだした。「責任感を持って」と言うの ではなく、如何に「責任を持つ」ような状況に置いてやるかが肝心なんだと言うことに気づいた。何か重要なことを発見したように感じ、やはり自分は凄い人間だと思えた。しかし、その考えも束の間で、特に取り立てて言うほどのことでもなく「当たり前」なのである。なぜか気にかかる「わくわく短文」として受け止めさせられることを苦々しく思いながらも充実感を感じるのだった。

『メンテナンスの重要性への認識と、それを可能にする資力を持つていることは、その民族の活力を計る基準だ。』

彼はこの短文を読んで、これは「民族の活力」の話だけでなく、「企業の力」についても同じだと思つた。メンテナンスとは創造したり設けたもの（機能）を当初の意図通りに維持する事をだと捉えた彼は、「5S（整理・整頓・清掃・清

潔・躰)が徹底できていない」ことや「決めたことが守られない」我が社の風土が、やはり企業力が弱いことの大きな要因になっているのではないかと思った。この「メンテナンス」のために経営資源という資力をもっと積極的に投入することを考えるとともに、このような役割をもっと積極的に総務部にも取り組ませようと考えた。

『人はしばしば自分とは反対の性格の持ち主の方を好む。』
彼は、今までに考えたことのない面白い見方であると思った。どうしても、自分が経営するに当たって、自分と同質というか同類というか、自分を理解してくれる人々との付き合い、意識しているわけではないのだが異質の人々との交流を避ける結果になっている。

「性格」は「価値観」とは異なる。自己弁護するのではなく、少し異質の人々とも付き合い、自分を広げてみようと思った。

『高度な緊張を要する生活をする人は、消化器系が弱くなるほどのストレスの連続なのだ。この状態を生き抜くために必要な資質は、第一に、自らの能力の限界を知ることも含めて、見たいと欲しない現実までも見据える冷徹な認識力であり、第二には、一日一日の労苦の積み重ねこそ成功の最大要因と信じてその労を厭わない持続力である。第三は適度の楽観性であり、第四は、いかなることでも不極

端に捉えないバランス感覚であると思う。」

一日一日の労苦の積み重ねこそ成功の最大要因と信じ、また「適度の樂觀性」は身に付けていると領きながらも、「自らの能力の限界を知り」、「極端に捉えないバランス感覚」があるとは思えない自分を考える。それでもこの激動の時代の経営者として自分はやっていけるし、やっていかなければならないのだ、と言いつつ聞かせている自分がいた。

『持続する意志自体は、賞められてしかるべき性向である。だがそれが、血の継続にここまで執着する様を見せられると、もはや「執着」より「執念」であり、さらには「執念」を越えて「妄執」にさえ映る。「妄執」は、悲劇しか生まないのだ。古代の人の考えでは、あくまでも運命を自分の思い通りにしようとする態度は謙虚を忘れさせ、それゆえに神々から復讐されるからであった。』

古代の人間だけでなく、人間にとつてこれは「業」みたいなものではないのかと思った。自分も含めて中小企業の経営者は、どうも自分の息子に後を継がせた欲望を捨てきれない。彼は自分の息子を客観的に見ることでできる方法があればいつも思う。

素晴らしい経営者になってくれそうだと思うことがある反面、こんな人間にうちの会社を任せたら1、2年で潰してしまえば兼ねないと思うこともある。しかし、やはり自分の後を継いで欲しいし、そのために無意識のうちに、息子を甘やかし

てしまっている。もう少し後を継ぎたくなる会社にすることが先決だと改めて考え直した。

『征服者に対する非征服者の不満は、個々の人が持つ限りは爆発までは至らない。爆発するのは、指導者を得たときである。また、征服者に対して被征服民族の支配層が不満を持つのは、征服される前に自分達が持っていた権力が、征服者に侵害されたと感じたときなのだ。』

彼はこれから吸収合併する会社のことを思った。会社や経営者の事情はどうであれ、吸収される会社の社員は被征服者の立場になる。征服される側の不満については注意深い関心と配慮を怠らないようにしなければと思った。

この吸収合併する会社の経営者は、吸収後も会社に残って貰うことだけは決めていた。しかし、この経営者の立場については、まだ彼はこれで行くこうという確固たる考えにはなっていなかった。しかし、この短文を読んで経営者の一員として技術の分野を見て貰うことにしようと考えようになった。

『法とは誰よりも上に立つ者が守ってこそ、下にある者にも強いことが出来る。』

ルールが守られにくい風土になっている根元的な要因は確かに自分にあると彼は思った。社員には言えない見えない激務の過ごし方をしているのだから、

これくらいが良いだろと思つてルールに反するような粗っぽいところがあるのを自分でも以前から感じていつた。この際、自分から姿勢を直すことにしようとなんぞ銘じた。

朝の床入り

この素晴らしい本を贈ってくれた友人を思い出す。友人は彼に「あなたとよく似た考えをしている本がありますよ」と言つて贈ってくれたことを思い出し苦笑いしながら、「まだまだ見開を広めて、より社会のためになる事業を行つて下さい」と陰で激励してくれている友人に感謝した。朝の新聞の配達音がした。もう土曜日が始まったのかと思ひながら今日は一寝入りしてから新聞を読むことにして、寢床に入った。